

【一】次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「ぼく」、南山^{わたなべ}渉は、古代人クロマニヨンの血をひいていると思ひ込んで、他の人とは違うことを悩んできた。本文は、高校三年になった「ぼく」が中学一年の時の思い出を振り返る場面である。

ぼくの絵を初めてほめてくれたのは、一年の途中から赴任^{しゆにん}してきた美術教師の小池だった。美術の教師というのはたいがいがそうだが、小池も他の先生とは少し違っていた。

三学期の創作画の授業の時だった。ぼくはクロの絵を描いていた。名前はクロだけれど、クロは黒犬じゃないから、いろんな色を塗^ぬてみた。茶色や白、太陽の光を浴びた時の黄色。泥^{どろ}んこになった時の土色^{つちいろ}。

背景は真っ赤な夕日だ。手前は川で、これは銀色。夏の日差し^{ひざし}の強い日には、こんな色に見える。いつのまにか小池が後ろに立っていて、ぼくにこう言ったのだ。

「強いな、お前の絵は」

「は？」^① 最初はほめられていることに気づかなかった。絵に強いとか弱いとかがあるなんて、その時まで聞いたことがなかったから。筆圧が強すぎるって注意されたのかと思った。

「それ、美術展に出してみないか」

小池の顔はふつうにしても笑っているように見えるから、この言葉も初めは冗談^{じやうだん}だと思った。

「これを？」 いましがた両隣^{りやうりん}のクラスメートから笑われたばかりだ。小池だってそれは聞いていたはずなのに。「冗談でしょ？」

「いいや、本気。俺^{おれ}、授業中と職員室じゃ冗談を言わないことにしてるんだ」

「だけど、自分で言うのもなんだけど、変な絵です」

小池は笑って言った。

「だいじようぶ、俺にはいい絵なんだから。正直に言って、入選は難しいだろうけど、誰かに見せてやりたくなる絵なんだよ」授業で描き切れなかった場合は宿題になる。どんな教科であれ宿題が嫌いなぼくは、いつもならさっさと授業中に描き終えてしまうのだが、その日は半分しか完成しなかった。小池にほめられてから、急に使う色やかたちを迷いはじめたせいだ。

夕日は本当に赤なんだろうか。

赤は本当に赤なんだろうか。

四角は確かに四角なのか。

丸はやっぱり丸なのか。

その日、ぼくは家に帰ってから、ずっと絵に色を塗っていた。^②赤の上に黒を塗り、黄色を重ね、また赤に戻す。そんなことの繰り返^{くりかえ}し。

次の授業の時、小池は完成したぼくの絵を見て、ひとことだけ言った。

「芸術だ」

県の学生美術展の審査会^{しんさかい}があった翌日、ぼくは美術室に足を向けた。授業がない時、小池はいつもそこにいるのだ。^③

ノックをして部屋へ入ると、思ったとおりトルソー[※]に顎^{あご}を載^のせて煙草^{たばこ}を吸っていた。

「お、結果が気になって来たのか？」

「いえ別に……通りかかっただけです」

「一年の教室は隣の校舎だろう。すごい通りがかり方だな」^④

ぼくの言いわけをひとりで面白^{おもしろ}がってから、小池はいつも笑っているような顔をほんの少し引きしめて言った。

「だめだった。俺も残念だよ。ま、選考委員は田舎^{いなか}画家ばかりだから、しかたない。その気にさせてしまっただけ悪かった」

「はあ」別に構わない。期待はしていなかったし。というのは嘘^{うそ}。美術室のドアを開ける時まで、「金賞だったよ」という小池の言葉を心のどこかで期待していたのだ。

「でもな、ダメだったからってダメだなんて考えなくていいぞ」

黙^{だま}ってうなづくことしかできなかった。意味がよくわからなかったからだ。

「俺はお前の絵が好きだ。なぜなら、俺には描けないから」

小池は眼鏡の中の小さな目を、くるくる動かして言った。

「ま、誰のどんな絵でも、俺には描けないんだけどね。絵はその人それぞれのものだから。ただし、小手先がうまいだけなら、ほとんど同じものを、もつとうまく描ける。小手先の個性とやらをもてあそんでいるような絵もね。でも、お前みたいな色使いや筆運びはまねできない。いい絵だよ、これは。他のやつ絵とは根っこのところから違う」

小池の言葉には嘘がない気がした。「いい絵だよ、これは」と言いながら、髭の伸びた顎で、美術室の隅を指した。そこにはこの学校の出品作品が山積みになっていて、^⑤ ぼくの絵だけが立てかけてあった。

^⑥ 小池の言葉はうれしかった。でも、同時に不安になった。

「ねえ、先生、ぼくはふつうじゃないんでしょうか？」

なぜそんなことを聞いたのか、自分でもわからない。トルソーの上に載った小池の首が、ギリシャ神話に出てくる小太りの神様みたいだったからだろうか。^⑦

小池がトルソーの上で首をかしげた。ぼくの言葉の意味を考えているようだった。首をもとに戻してから、ぼくの薄茶色の目を覗きこんできた。

「いいか南山、ふつうの人間なんて、どこにもいないんだよ。みんな少しずつ違う。確かに地球の上から見下ろせば、お前の存在は何十億分の一でしかない。俺もそう。ちつぽけなもんだ。世間で言う『地球より重い』なんてたいそうなものじゃない。だけど、考えてみろよ。何十億分の一にしろ、お前はこの世にお前しかないんだぜ」

その答えをぼくはとても気に入った。今でも胸の中にしまっていて、ときどき取りだして、^⑧ トロフィーみたいに眺めている。もっと言えば、こうだ。

人類の歴史から考えると、ぼくの存在は何十億どころか、何百億分の一だろうけど、この地球の歴史においても、ぼくという人間は、ぼくしかないのだ。

県大会で四位どまりでも、美術展で落選しても、そう考えると、なんだか誇らしい気分だった。

(『四度目の氷河期』 萩原浩)

※トルソー：頭や手足のない胴体だけの彫像

問一 —— 線部①「最初はほめられていることに気づかなかった」とありますが、その理由として適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア ふつうにしているにも笑ったような顔をしていて、よく冗談を言う先生だったから。

イ 絵を描くことに集中していて、小池先生の言葉を聞いていなかったから。

ウ 今までずっと筆圧が強いと注意されてきたので、今回もそうだと思ったから。

エ 今まで「絵が強い」という表現でほめられたことなど一度もなかったから。

オ 一生懸命描いた絵を笑われたぼくをなぐさめようとしてくれたのだと思ったから。

問二 —— 線部②「赤の上に黒を塗り、黄色を重ね、また赤に戻す。そんなことの繰り返し」とありますが、その時の「ぼく」の思いに最も近い意味を表す四字熟語を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 千変万化 イ 試行錯誤 ウ 奇想天外 エ 四苦八苦 オ 日進月歩

問三 —— 線部③「美術室に足を向けた」とありますが、このときの「ぼく」の思いとして適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア たまたま近くを通りかかったので、せっかくだから結果を聞いていこうと思った。

イ 十分に時間をかけ力を尽くして描いた自信作だったので、早く結果を知りたいと思った。

ウ 心のどこかで結果を期待していたので、気になって自分から聞きにいつてみようと思った。

エ 入選しているとは思わなかったが、小池先生が待っているような気がしたので寄ってみた。

オ 初めての美術展出品なので、結果がどうであれしつかりと受け止めて次に生かそうと思った。

問四 —— 線部④「一年の教室は隣の校舎だろう。すごい通りがかり方だな」と言ったときの小池先生の表情として適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア からかうような笑い顔

イ 驚きながらも嬉しそうな顔

ウ すべて見透かした得意顔

エ 気まずさをこまかそうとした顔

オ 残念そうにあわれむ顔

問五 — 線部⑤ 「ぼくの絵だけが立てかけてあった」とありますが、小池先生がそうしたのは、どのような気持ちからですか。その気持ちがわかる小池先生のことばを、十八字以内でぬき出して答えなさい。

問六 — 線部⑥ 「小池先生の言葉はうれしかった。でも、同時に不安になった」とありますが、このときの「ぼく」の思いを六十字以内で説明しなさい。(句読点も字数に入れます。)

問七 — 線部⑦ 「首をかしげた」とありますが、このときの小池先生の様子を説明したものとして適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア どう答えたら「ぼく」を傷つけないか、慎重に考えて答えようとしている。

イ 「ぼく」の問いを真剣なものと受け止めて、真剣に答えようとして考えている。

ウ 「ぼく」の言葉の意味がよくわからずに、困りながらも何とか答えを探そうとしている。

エ 「ぼく」がどんな答えを期待しているのかをよく考えて、言葉を選ぼうとしている。

オ 大事なことから集中して考えたいと「ぼく」にそれとなく伝えようとしている。

問八 — 線部⑧ 「トロフィーみたいに」という比喩には、「ぼく」のその答えに対するどのような思いがこめられていると考えられますか。ふさわしくないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア その答えによって、自分は誰よりも優れているのだと誇らしい気持ちになれる。

イ 小池先生のその答えを、時間が経った今も変わらずにとっても大切に思っている。

ウ その答えは、自分を誰かと比べる必要などないのだと教えてくれる。

エ ありのままの自分でいいと思えるようになったのはその答えのおかげだ。

オ その答えを思い起こすと、小池先生にほめられたときの気持ちがよみがえってくる。

【二】次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

先ごろ厚生労働省が発表した「国民健康調査」によると、国民の有病率(何らかの病気やけがをしている割合)は八人に一人の割合になっていくことが明らかになった。昭和の五〇年代前半は一〇人弱に一人だったのに比べ、高い水準になっているのである。

「医療は進歩している」と言われながら、現実には病気が増える一方だ。なぜ病気は増え続けるのだろうか……。

アメリカ議会は、二年の歳月と多くの予算を使って、原因の解明に乗り出した。そのレポートは五〇〇〇ページを超えるものだったが、原因はたった一つ、「毎日の食生活に無【I】」だったため」と述べている。レポートの中では「先進諸国の食事は、我々が気がつかないうちに、非常にアンバランスで内容の悪い不健康な食事になってしまった。食事の悪さが病気多発の最も大きな原因だ」と締めくくっている。

その上、このレポートの中では、ガンや糖尿病、心臓病のみならず、ノイローゼなどの精神的な問題さえも、その背景にはあやまつた食生活があると指摘している。

A、全米科学アカデミーの特別委員会は米国立ガン研究所の要請で、一九八〇年から「食物、栄養とガン」に関するあらゆる科学的情報を総合的に検討した。その検討した科学者グループによると、「何を食べるか、どれだけの量を食べるか、何を飲むかによってガンになる危険性は高くなったり低くなったりする」と述べている。

これら二つの報告書は、全く同じ結論に達している。つまり、ガンをはじめとしたほとんどの病気は、
B が原因の病気……「食源病」であるという結論を出しているのだ。

これらの報告書が、国をあげて多くの頭脳と資金を用いたものであるのに対して、我が国ではたった一人でそれらの報告書に匹敵する調査をした学者がいる。その人は、東北大学の故近藤正二博士である。

近藤博士は、「長生き村になったのも、短命村になったのも、一番の決め手になった原因は、若い頃から長い間、何十年という間続け てきた食生活にある」という結論を出している。まさに、「食源病」をズバリと指摘しているといえよう。

考えてみれば、私たちが生まれてきたときの体重は、わずか三キログラム前後だったはずである。それが、大人になると五〇キロにも六〇キロにもなっている。その増えた分は食物以外の何物でもないのである。毎日何気なく食べている食物、その積み重ねが今の体を作っている。

健康な毎日過ごすか、病気になるか、いろいろな原因、理由があることだろう。ジョギングで汗を流したり、精神的ストレスを取り

除く努力をしたり、体操をしたりあるいはお酒をやめることも大切かもしれない。もちろん食生活だけで健康を語ることはできないと思う。**C**、多くの人たちも、現代の医療機関も、私たちの「体」を作っている材料である「食物」に対し、あまりにも無**I**すぎるのではないだろうか。

最近では、書店に行くと『〇〇健康法』といった本が目につくようになってきた。なかでも食生活に関するものがとても増えている。それだけ食生活と健康問題に関心を持つ人が増えているということかもしれないが、^①最近の風潮を見ると本当にこれでいいのだろうか、という疑問が出てきてしまうのである。

先日、都内のある書店に行き、どのくらい食生活と健康に関する本があるのかを調べてみたところ、その書店には一〇〇種類あった。しかし、それらを冷静に見てみると、ほとんどが実際に食生活について書かれたものではなく、食物、あるいは栄養素について書かれているものばかりなのである。

食物というのは、『大豆健康法』『クコの実で健康になる』などのように、ある一つの食物を中心として書かれているものである。栄養素というのは、『ビタミンE健康法』『ガンとビタミンC』など、食物の場合と同様、一つの栄養素を中心に書かれている。

参考のために、どのようなものがあつたのか挙げてみよう。

おかゆ、パイナップル、鶏肉、お茶、ヨーグルト、ビタミンC、ビタミンE、クエン酸、オリゴ糖……などといったものである。それらには「〇〇で健康になれる」「〇〇で頭がよくなる」「〇〇で寿命がのびる」といった言葉が書かれている。その中でも、目を引くのが『驚異の〇〇』と書かれたものの多さである。たった一つの書店でこれだけの本があるのだから、出版されているものを全部調べたら大変な数になりそうである。

それはそれでいいのだが、私が心配するのはこれらの本のほとんどが、「〇〇さえ食べれば病気は治る」といったものだということである。なかには、あたかもその食物、その栄養素さえ食べれば、すべての病気は解決するといわんばかりのもののさえあるのだ。

私が食生活の指導をするとき最初に、「何か食生活で注意していることはありますか？」と聞くようにしているのも、こういった本、あるいはコマーシャルやテレビ番組などの影響を受けて、^②おかしな食生活をしている人も少なくないからだ。

たまたま、書店で『イワシ健康法』という本を手にした人は、朝から晩までイワシばかりを食べ、『牛乳健康法』という本を読んだ人は、ご飯もろくに食べずに、牛乳を一リットルも飲んでい。最近ではアメリカで出版されたものも数多く紹介されている。^③

このような本を読んだ人たちは、日々の食生活に対する改善は考えずに、いろいろなビタミンが不足するような生活をしながら、高価

なビタミン剤を、せっせと胃袋に流し込んでいるのである。ある一定の食物を大量に食べたり飲んだりすることや、いわゆる健康食品でビタミン、ミネラル類を取ることが、すなわち食生活を変えることだといった風潮さえある。

よく、「現代人はビタミンCが不足しています。ビタミンCの補給は〇〇で」といったコマーシャルを耳にするが、不足を何かで補うことよりも、不足しないように毎日の食生活を心がける、その方が大切だ。

古今**II**、多くの人々が、不老長寿の薬を探し求めたように、万病に効く食物や栄養素を探し求めている。日本では、古くはヨーグルト、アロエ、青汁、最近では野菜スープなどさまざまなものが、健康にいい、病気に効く、ということでもブームになった。

健康（ヘルス）の「ヘル」は「全体」という意味だ。健康は食生活を抜きにしては語れない。しかし、語れるものでもないのだ。ましてや、一つの食物、一つの栄養素で健康を語ることは、少し「部分的」すぎるのではないだろうか。

「これさえ飲めば、これさえ食べれば」という特別な食物や栄養素、魔法の食物を追い求めるよりも、身近な毎日の食生活に問題はないか……そのことに目を向けてほしい。その次に「何か」を考えてみればよいのではないだろうか。^④それが、真の意味での食生活の改善だと私は思っている。

そこで、現代の食生活を改善して「食源病」を防ぐ、てっとり早くしかも簡単な方法を紹介しよう。それは、日常的に食べるものを「カタカナ食品」から「ひらがな食品」に変えるということである。

「なんだ、そんなことか」と言われそうだが、実際に実行してみると、いかに私たちの食生活にカタカナ食品があふれているか、そして、^⑤どんなに無意識のうちにたくさんのかたかな食品を食べているかがわかる。

もちろん、これはかなり大まかな目安だ。すべてのカタカナ食品が悪いわけではないし、なかにはひらがな食品をカタカナ食品に変えた方がいい、といった例外もある。しかし、食事改善のために難しいことを考えたり、めんどろな手間をかけたくないという人にとって、カタカナ食品を極力減らすだけでも、何もしないよりは、食生活の改善ができるはずなのだ。

カタカナ食品をひらがな食品に変えるのは食生活改善のための第一歩である。

（『粗食のすすめ』 幕内 秀夫）

問一 **A・C** に入るものとして適切なものを次の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

ア たとえば イ そして ウ しかし エ また オ つまり

問二 「Ⅰ」に入ることはとして適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。また、「Ⅱ」に漢字二字のことばを入れて、四字熟語を完成しなさい。

ア 関心 イ 遠慮^{えんりょ} ウ 関係 エ 教養 オ 作法

問三 B に入る八字のことばを本文中からぬき出して答えなさい。

問四 — 線部①「最近の風潮」を説明した次の文の（ ）に本文中のことばを三十字以内にまとめて補い、文を完成しなさい。
(句読点も字数に入れます。)

書店にある食生活と健康に関する本のほとんどが（ ）ものであるということ。

問五 — 線部②「おかしいな食生活」とはどのようなところがおかしいのですか。適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 健康でなくなった原因を食生活にばかり求めて、いろいろな健康食品を大量に買っては食べているところ。
イ 健康についてのある情報を得ると、それを守れば問題が解決されるところと考えて、そればかり飲食するところ。
ウ 本やテレビでやっている健康ブームに乗って、次から次へと新しい食生活にチャレンジしているところ。
エ 本やテレビで流れる健康の情報をそのまま信じて、自分で料理をするなど食生活を工夫しなくなるところ。
オ 高価な健康食品を飲食すれば健康になると考えて、運動不足やストレスに気を配らなくなっているところ。

問六 — 線部③「それ」が指す内容を四十字以内で書きなさい。(句読点も字数に入れます。)

問七 — 線部④「どんなに」が直接かかっていくところとして適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 無意識のうちに イ たくさんの ウ カタカナ食品を エ 食べているかが オ わかる

問八 — 線部⑤「カタカナ食品をひらがな食品に変える」とは、具体的にはどうすることですか。(例)を参考に（ ）に入るものをひらがな四字以内で書きなさい。

(例) ポテトチップス ↓ センべい

1 ハンバーガー ↓ () 2 ラーメン ↓ ()

問九 次の一文を元にもどすどこに入りますか。この文が入る直前の文の、終わりの六字をぬき出して答えなさい。(句読点も字数に入れます。)

その積み重ねに間違いがあれば、どこかに異常が出ても不思議ではないのだ。

問十 本文の内容に合うものには○印、合わないものには×印をそれぞれ書きなさい。

ア 国民の健康状態を調べることは国の責任であり、人手やお金がかかるため国にしかやれないこともある。
イ 大人が健康を保つためには、食生活を改めるよりも運動をし、お酒やたばこをやめることで十分である。
ウ テレビ番組やコマーシャルで取り上げられた食生活をそのまま信じて実行することは危険なことである。
エ 病気に効く食べ物や栄養素がないわけではないので、それらをうまく食生活に取り入れることが大切である。
オ カタカナ食品をひらがな食品に変えることは万能ではないが、現代人の食生活を変える工夫の一つである。

【三】次の各問いに答えなさい。

問一 次の①～⑩の——線部のカタカナは漢字に直し、漢字は読みを書きなさい。

- ① 布をちる。
- ② 山のイタダキに立つ。
- ③ 人のケハイがする。
- ④ 日本コユウの文化を守る。
- ⑤ 事件のことはコウガイしてはいけない。
- ⑥ 二人の性格はタイシヨウ的だ。
- ⑦ 子どもの健やかな成長を願う。
- ⑧ 過去の自分の行いを静かに省みる。
- ⑨ 若人の集いに出る。
- ⑩ 船の甲板に出て夕日を見る。

問二 次の①～③はある一定の規則（ルール）にしたがって並んでいます。それぞれの□に入る漢字として適切なものを下の選択肢から選び、解答欄に書きなさい。ただし、「↓」は、順に変化していくことを示し、「↑」は、共通の要素を持つ漢字であることを示します。

- ① 参 ↓ 信 ↓ 寸 ↓ □ ↓ 村 「円 本 船 連 安」
- ② 人 ↓ 子 ↓ 友 ↓ □ ↓ 老 「弟 母 父 妹 自」
- ③ □ Ⅱ 告 Ⅱ 呼 Ⅱ □ Ⅱ 味 「困 研 倍 国 句」

問三 次の①・②の□には、それぞれある漢字が入ります。その中で□に入る二字の漢字の関係が他と異なるものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ① ア □ 転 □ 倒 イ □ 寒 □ 温 ウ □ 朝 □ 夕 エ □ 人 □ 脚 オ □ 捨 □ 入
- ② ア □ 体 □ 命 イ □ 画 □ 賛 ウ □ 種 □ 様 エ □ 知 □ 能 オ □ 同 □ 異

平成二十二年 度

目黒星美学園中学校入学試験（国語）

第一回

※ 答えはすべて解答用紙に書きなさい。

受験番号	
氏 名	